

## 2 <sup>もくぞうだいにちによらいざぞう</sup>木造大日如来坐像 <sup>く</sup>1 軀 [有形文化財（彫刻）]

[所在地] 宇陀市大宇陀岩室 372 番地

[所有者] <sup>いわむろく</sup>岩室区

[法 量] 像高 91.4 cm

[時 代] 平安時代（10 世紀後半～11 世紀前半）

[概 要]

<sup>こうたいじんじや</sup>皇大神社境内に建つ大日堂の本尊として祀られる大日如来像。法界定印を結ぶ胎蔵界の姿で、かつて当地にあった崇福寺（<sup>すうふくじ</sup>明治 7 年廃寺）の旧仏と伝えられる。

等身大の一木造り。頭体幹部は<sup>けやき</sup>欅材、脚部は<sup>ひのき</sup>桧材を用いる。異種材を併用するのは平安時代中期にしばしばみられる特徴で、脚部材の接合面を体幹部の形状に合わせてわずかに湾曲させる手法や、脚部の浅い内割りにも同じ時代性がうかがえる。安定感のある重厚な姿に古様さをとどめる一方で、伏し眼の温和な表情や<sup>ひだ</sup>襷数少なく整理された衣文の表現には和様化の傾向が認められることから、製作年代は 10 世紀後半から 11 世紀前半頃と推定される。大日如来像の作例は多くが<sup>ちけんいん</sup>智拳印を結ぶ<sup>こんごうかい</sup>金剛界の姿で、胎蔵界の像は県内では少ない。本像は宇陀地方に伝わる平安時代中期に遡る密教仏の優品として貴重である。

